

埋蔵文化財緊急調査事業に係る  
埋蔵文化財調査報告

平成15年度増山城跡総合調査概報

# 増山城跡 VII

2004年3月

砺波市教育委員会

# 序

増山城は、南北朝の時代から近世の初めに至る約250年の歴史があり、砺波地方の歴史と深く関わりをもっています。特に戦国時代に突入すると、神保氏や越後長尾氏（上杉氏）、織田氏、佐々氏、前田氏など、越中領有を目指す様々な勢力が攻めぎあう最前線となっていました。

また、増山城跡は県内有数の規模を誇るものとして知られており、「越中三大山城」の一つとして数えられています。中世の山城で、往時の状態を良好な形で保存されている県内でも希少な遺跡で、城跡は昭和40年に富山県指定史跡に、城下町跡の土塁は昭和56年に砺波市指定史跡とされています。

この増山城跡で本格的な調査がはじめられたのは、昭和60年代前半に砺波郷土資料館が実施した増山城跡調査事業です。この調査から、二重に巡る空堀をはじめ、櫓台や郭跡など、従来考えられた以上の大規模な縄張りをもつことなどが判明しました。

この調査は踏査を中心に実施しており、埋蔵文化財に関する調査が実施し得なかった点などに課題が残っていました。そのため、城の構造解明を目的とした増山城跡総合調査事業を国や富山県の補助を受けて、平成9年度から7ヶ年計画で実施することとしました。最終年度となる今年度は、増山城郭群を形成する要素の一つである亀山城跡と、増山城跡と南の谷を挟んで対峙する赤坂山を調査対象として確認調査を実施しました。調査の結果、亀山城と増山城が併行利用された時期があることや造成の状況などを確認しました。

この小冊子は、まだまだ内容としては不十分ですが、発掘調査によって得られた数少ない資料を紹介し、調査の成果を概報として作成しました。文化財を通じて先人の文化を理解・伝承するとともに、地域の歴史と文化の活用にいくばくかのお役に立てば幸いです。

おわりに、調査の実施に多大なご協力をいただきました増山城跡総合調査委員会や地元増山地区、富山県埋蔵文化財センターなど、関係の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

砺波市教育委員会

教育長 堀田 良男

## 例　　言

1 本書は、富山県砺波市増山地内に所在する増山城跡の埋蔵文化財調査概要である。

2 事業は、緊急発掘調査事業によって実施した。

3 調査期間・面積は次のとおり。

発掘調査期間 平成15年度 平成15年9月29日～平成15年12月11日

測量調査対象面積 108,000m<sup>2</sup> 発掘面積 294m<sup>2</sup>

4 調査体制は以下のとおり。

増山城跡総合調査委員会 日本考古学協会会員 西井龍儀

富山県埋蔵文化財センター 所長 岸本雅敏

富山県教育委員会文化課 課長 舟崎邦雄

郷土史家 佐伯安一

城郭研究家 高岡 徹

砺波市文化財保護審議会 委員 堀田多聞

砺波市文化財保護審議会 委員 砂田龍次

砺波野地区増山自治振興会 土田昌春

砺波市教育委員会 教育長 堀田良男

調査担当者 砧波市教育委員会 生涯学習課 学芸員 利波匡裕

同 学芸員 野原大輔

調査事務局 砧波市教育委員会 教育次長 喜田豊明

同 生涯学習課 課長 老松邦雄

同 生涯学習課 係長 喜田真二

砺波郷土資料館 館長 新藤正大

なお、現地の清掃・作業員については、増山地区自治会（小嶋五郎区長）、増山城跡整備委員会（宮野秀一委員長）、砺波市シルバー人材センターより協力を得た。測量調査については株式会社上智に委託した。

5 資料の整理については、利波、前田紋子、根田勝子が行った。本書の編集と執筆は、利波が行った。

6 調査期間中および資料整理期間中、の方々から御教示・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。（敬称略、五十音順）

尾田武雄、酒井重洋、宮田進一、宮野秀一

7 調査において次の地権者の方々に御理解・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。（敬称略、五十音順）

土田一夫、水上登美子、宮野秀一、増山神社氏子一同

8 本書の挿図の表示については、方位は真北、水平水準は海拔高である。

9 本文中の表記については『増山城跡調査報告書』〔砺波市教育委員会・砺波郷土資料館1991〕に準拠する。

10 出土品および記録資料は砺波市教育委員会で保管している。

11 発掘調査・整理参加者は次のとおりである。

佐藤隆（砺波市教育委員会嘱託）、天野秋一、荒木久平、水森是、加藤福蔵、島田一郎、高島一子、谷井忠義、西村昌蔵、

信田豊次、信田正明、松田利子、松田正信、安カ川礼子（以上砺波市シルバー人材センター）

## 目 次

序 文	
例 言	
日 次	
I 遺跡の立地と歴史的環境	1
II 調査に至る経緯	1
III 調査の経過と方法	1
1. 調査の経過	1
2. 座標軸の設定	3
IV 調査の概要	3
1. 概 況	3
2. 造構および層序	3
3. 遺 物	12
V まとめ	16

引用・参考文献

写真図版

### 【図表】

第1図 周辺の遺跡分布図	第7図 T 3～5断面図
第2図 平成15年度調査範囲図	第8図 T 6～9断面図
第3図 トレンチ位置図1 (T 1～8)	第9図 出土遺物1
第4図 トレンチ位置図2 (T 9)	第10図 出土遺物2
第5図 T 1断面図	第11図 出土遺物3
第6図 T 2断面図	
第1表 周辺の遺跡一覧	

## I 遺跡の立地と歴史的環境

増山城跡は砺波市の東部、婦中町との境に近い庄東山地の丘陵上に位置する。芹谷野段丘と庄東山地の間には和田川が複雑に蛇行し、地質英縫である青井谷泥岩層を抉り込み、深い谷を形成している。その谷をせき止めて和田川ダムが築かれ、ダムの東側、急崖の上に増山城跡が立地している。

周辺にはⅢ石器時代から近世に至るまで、多くの遺跡の存在が知られている。特に城跡の近隣には、増山団子地窯跡をはじめ増山外貝喰山窯跡、小丸山1・2号窯跡、増山赤坂窯跡、増山笠山窯跡、正権寺後島窯跡など、古代の窯跡が多数確認されており、芹谷野段丘沿いに比定されている井山、伊加流伎、石栗の各莊との関連を考えられる。増山城跡と対峙して和田川を挟んだ丘陵上には増山遺跡が存在する。昭和52年、圃場整備事業に関連して発掘調査が行われ、純文・古代の遺物、中世末～近世初頭の遺物・遺構が検出された。この発掘調査結果とこれまでの文献資料により、当地が増山城跡の城下町であることが確認されている。

## II 調査に至る経緯

増山城跡の本格的な調査については、高岡徹氏、西井龍儀氏を中心として砺波郷土資料館が昭和62年から約3年にわたって実施している。この調査では、城郭・文献・考古の三分野の研究者による調査グループが結成され、作業が進められた。調査の結果、増山城自体の繩張りが初年度にはほぼ判明し、二重の空堀や櫓台、長大な堅堀、郭跡など数々の成果があげられた。その成果をふまえ、昭和63年11月には増山城跡を中心として「北陸地方中世城館セミナー」が開催された。

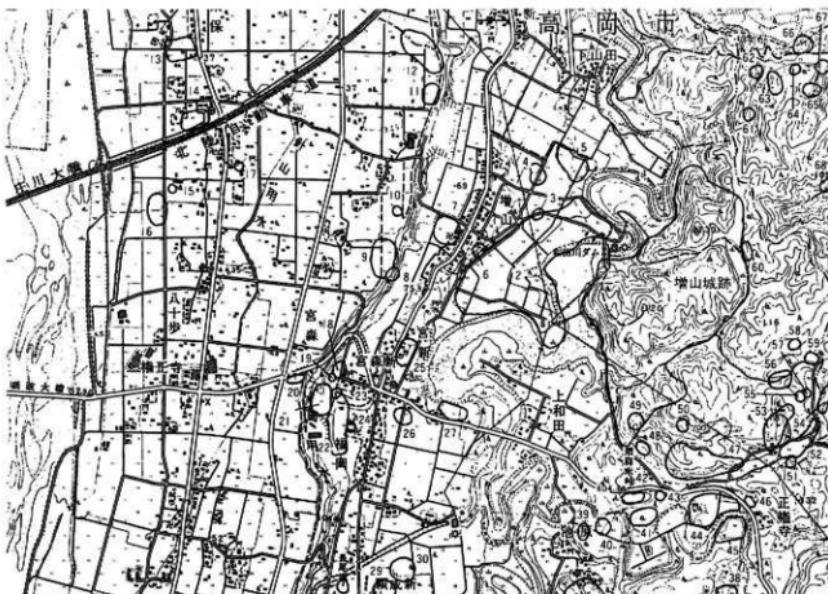
これまでの調査では、増山城跡の現地形観察が行われていたが、より明確に増山城跡の実態を把握するため考古学的な調査が必要であることが望まれていた。これを受けて、砺波市では平成9年度に増山城跡総合調査委員会を設立し、増山城跡の実態を解明するとともに、重要な文化遺産を周知・活用する方法を検討することとなった。平成9年度から平成11年度までの調査では、いわゆる増山城跡のエリアを中心として発掘・測量調査を実施した。その結果、複数回にわたる大規模な造成工事が実施されていること、大胆な設計変更を行なっていること、16世紀中頃から17世紀初頭までの遺物が多量に検出されていることなど多くの成果が得られた。

## III 調査の経過と方法

### 1. 調査の経過

今年度の発掘調査地は2ヶ所に分かれている。まずは、増山城跡とは谷を隔てて北方に所在する、亀山城跡の最頂部を中心とした範囲である。当地は、亀山城跡の中心郭であること、建築物などの遺構の存在が期待される場であること、が選定の理由である。また、増山城跡と谷を隔てて南方に所在する赤坂山地内において、屋敷跡と推定される平坦面を対象とした。

発掘の事前に、発掘調査対象区およびその周辺の下草刈りを実施し、並行して堆積物の除去作業も行い、地形の変化が分かり易いように努めた。その後、幅約1～2mでトレンチを設定し、最終的には計9ヶ所の掘削を行った。トレンチの設定については、平坦面や溝などに直交するとともに、断面図にて各所のエレベーションを確認できるよう努めた。掘削は地表面までを基準としたが、階位関係で地表面まで到達していないトレンチも存在する。発掘は人力にて掘削を行った。また、立木の伐採は基本的に行わないこととし、トレンチ内においても立木を残している部分



第1図 周辺の遺跡分布図 (S = 1 / 25000)

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	増山城跡	山城	中世	35	新成A遺跡	散布地	縄文
2	増山城跡	散布地・集落	縄・古・中・近	36	新成C遺跡	散布地	縄文
3	増山城跡	墓	奈良	37	新成D遺跡	散布地	旧石器?
4	高沢山三遺跡	散布地・集落	古代	38	新成B遺跡	散布地	縄・平・中
5	高沢山I・II遺跡	散布地・集落	III・IV・古・近	39	鼠塚	墓	中世?
6	増山城址板塗跡	集落	奈良	40	鼠塚遺跡	散布地	縄文
7	増山城跡	散布地	古代?	41	原麻北古墳群	散跡	古代
8	宮森遺跡	墓	奈良	42	原麻北古墳遺跡	散布地	財・豪・古
9	宮森南寺跡	寺院	鎌倉	43	道原山古墳群	散跡	古代
10	行者塚	墓	中世?	44	正梅寺古墳群	散布地	平安
11	東陽山板塗跡	散布地	古代	45	正梅寺市街跡	散布地	平安
12	東陽山板塗跡	散布地	縄・奈・陳	46	正梅寺市街遺跡	散布地	中世?
13	熊ノ下居跡	城郭	中世	47	金クソ山遺跡	散跡	古代
14	東陽山遺跡	散布地	平安・難倉	48	金クソ山西遺跡	散跡	古代
15	東陽山若堂遺跡	寺院?	中世	49	増山王子山遺跡	墓	奈良
16	高野遺跡	散布地	平・僅・難	50	増山赤坂遺跡	墓	平安
17	東野山沿山遺跡	散布地	古代?	51	正梅寺高見空跡	空	平安
18	宮森東北鳥I遺跡	集落	縄文	52	正梅寺寺内遺跡	散布地・墓葬	平安
19	光明寺古墳	墓	中世?	53	増山十村山遺跡	散歩地・集落	縄文・古代
20	宮森遺跡	散布地	縄文	54	小丸山遺跡群	墓	平安
21	大谷山遺跡	散布地	縄・奈・平	55	増山外只見山山廻跡	墓	奈良・平安
22	鶴川山遺跡	集落	縄文	56	増山施山遺跡	散跡	古代
23	宮森東京跡	墓	中世?	57	増山外只見山山廻跡	散布地	旧石器
24	東野山境内遺跡	島?	鎌倉	58	増山施山遺跡	墓・散跡	平安
25	宮森遺跡	散布地	奈良	59	増山外只見山山廻跡	墓	平安
26	宮森新大油遺跡	散布地	縄文	60	増山密裏山遺跡	散跡	古代?
27	上和田遺跡	散布地	縄文	61	西谷No.9遺跡	史跡?	古代?
28	庚尾山古墳	墓	中世?	62	西谷No.7遺跡	史跡?	古代?
29	長尾山古墳	墓	中世?	63	西谷No.8遺跡	史跡?	古代?
30	新成井遺跡	散布地	縄文	64	西谷No.5遺跡	史跡?	古代?
31	序谷下人門遺跡	散布地	中世・近世	65	西谷No.6遺跡	史跡?	古代?
32	千光寺遺跡	寺院	中世	66	西谷No.4遺跡	史跡?	古代?
33	序谷遺跡	散布地	旧・縄・古	67	西谷山遺跡	墓	平安
34	池原遺跡	散布地・集落	古・縄・古	68	西谷No.10遺跡	史跡?	古代?

表1 周辺の遺跡一覧

がある。埋め戻しは人力にて行い、斜面では崩落を防ぐために土のう袋を積み上げることによって斜面を復元した。調査終了の後、地元住民を対象として現地説明会を開催した。天候不順の中、約50名の見学者が訪れ盛況をみせた。調査にあたり、増山城跡総合調査委員会において今年度の調査対象区の選定と具体的な調査方法を検討し、調査期間中には現地にて遺構・遺物の検出状況を確認しつつその時点での発掘の成果や今後の調査について検討を行った。調査後には、成果報告および今後の調査のあり方について確認した。

## 2. 座標軸の設定

座標軸は増山城跡から亀山城、孫次山砦などを視野に入れ、国土地理院設定第VII座標系のうちX=72.5km、Y=-11.5kmの点を原点として設定した。南北軸をX軸とし、X=0から北方向へX座標の数値が増える。同様に東西軸はY軸とし、Y=0から東方向へ進むにつれて、Y座標の数値が増える。1グリッドの区画は10×10mとし、今年度の調査区の範囲はX=280~310, 680~720, Y=280~320, 420~510である。また、今年度の測量調査対象面積は108,000m<sup>2</sup>で、発掘面積は294m<sup>2</sup>である。

# IV 調査の概要

## 1. 概況

亀山城跡は、増山城郭群を構成する山城の一つである。調査対象地区は亀山城跡の最頂部、標高約131mの山地中に所在する。一帯の現況は、杉や雜木などの森林となっており、杉は戦後の植林による。亀山城跡が立地する場所は高津保里山といわれ、人正7年まで「高坪里神社」が建っていた。神社建立の由来は、この地は江戸時代において加賀藩の御林だったが、幕末から明治にかけて民間へ払い下げられ、そこを開墾していた人が一体の神像を発見し、増山の山神様として祀ったことによるといわれている。明治元年には増山神社へ勅請され、現在石垣のみがその当時の姿をとどめている。また、標高131.1mの三等三角点が設置されている。

赤坂山は、増山城郭群の南部にあり、増山城跡とは谷を挟んで対峙する丘陵である。丘陵を上ると谷を臨むようにひらかれた平坦面が存在する。平坦面は現在荒れ地となっているが、以前は畑として利用されていたそうである。

城域各地の名称は、増山城跡調査報告書〔砺波市教委ほか1991〕の高岡徹氏による各郭の仮称を参考とすることとした（第2図）。

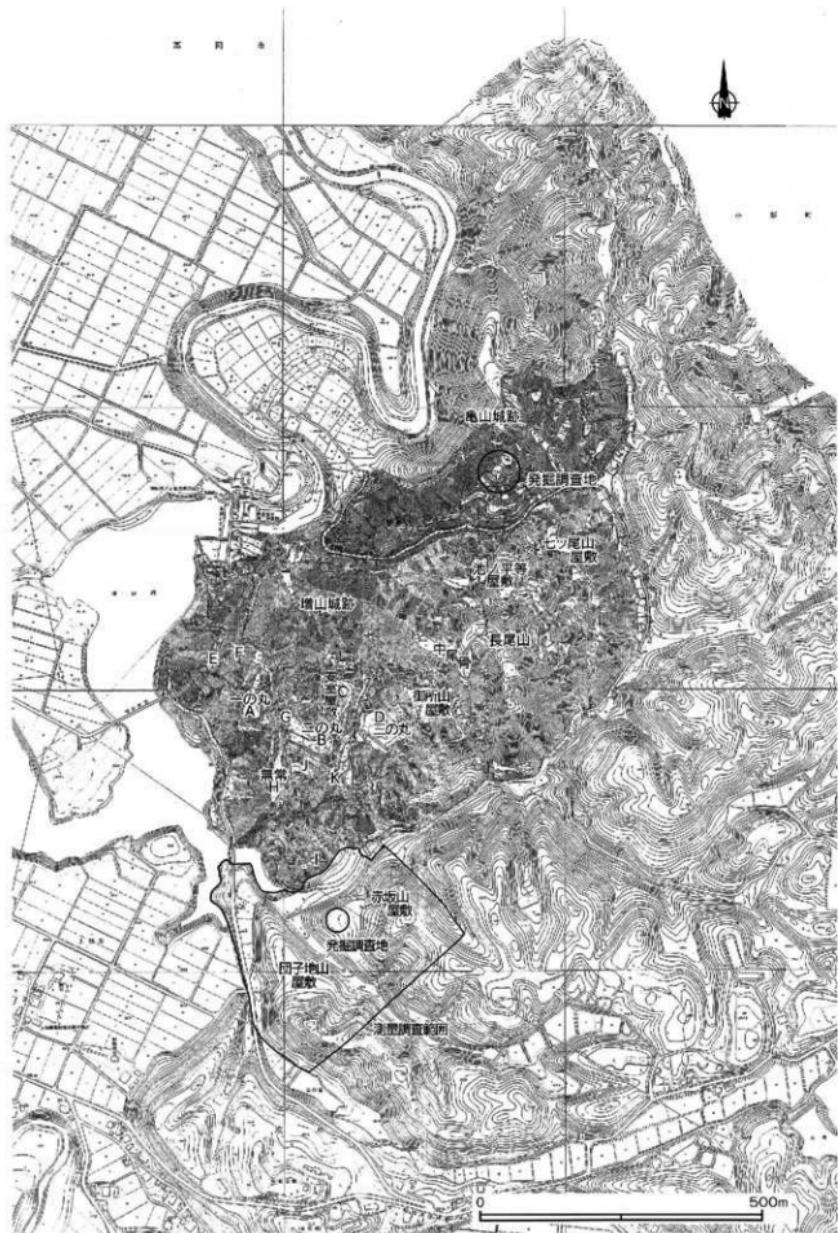
## 2. 遺構および層序（第3～8図）

### （1）亀山城跡最頂部平坦面周辺（T1～8）

最頂部平凹面は、円形が二つ重つたような形をしている。くびれ部分は地表面観察では約50cmの深さをもつ溝となっている。平坦面の長軸は北東方向で約53m、幅は平坦面Aが約28m、平坦面Dで約22mである。面積は約1,100m<sup>2</sup>。平坦面Aから南東へは平坦面B、平坦面Cと二段の平坦面がある。平坦面Dから南西方向へは8m下方に平坦面Eがある。

各トレンチの地層断面観察による基本層序は、表土の第1層（暗褐色土）、盛土の第5-⑥層（褐色土、シルト質、炭化物含）、地山の第10-②層（明黄褐色土、シルト質）および第10-⑤層（にぶい黄褐色土、泥岩）となる。

平坦面Aでは、平坦な部分では表土第1層が約10cm、その下位に第5-⑥層が約20cm堆積し、地山である第10-②層となる。T1北端、T2西端、T4西端では、いずれの場所においても重層的な盛土状況が確認された。これは平坦面の拡大を意図して盛土が行われたとみられる。T1北端は第5-①～③、⑤、⑥層により盛土を実施し、その後、



第2図 平成15年度調査範囲図 ※A～Lは高岡徹氏による仮称【砺波市教委・砺波郷土資料館1991】

第4-①～③層によって再度盛土を行なっている。第5-⑤層は腐食礫層であり、他の層とは異質である。T2西端は第5-①～③、⑥層による盛土であるが、炭化物がみられない。T4西端は第5-①、②、④、⑥層により盛土を行い、第5-③層中では焼土の付近に2枚重なった土器が確認された。

平坦面Bは、厚さ約10～40cmの第5-⑦層が第5-⑥層の下位に確認される。第5-⑦層は平坦面Aとの斜面付近から平坦面Cへと続く。平坦面Cでは第5-⑥層が確認されない。さて、平坦面Bは第1層および第5-⑥層からの遺物の出土がみられ、本調査区において最も遺物が集中して出土した場所である。第5-⑦層からの遺物出土がほとんどないことから、第5-⑥、⑦層はほぼ同時に盛土が行われたと判断される。

平坦面Cでは切岸を埋めた痕跡を確認した。第9-②～⑦層がそれであり、第9-②、③はシルト質であるが、第9-④～⑦は砂利層と腐食礫層が交互に盛られている。この砂利層と腐食礫層は亀山城跡最頂部付近では確認されず、持ち込まれた可能性が高い。第9-①層では面的に炭化物が広がっており、また焼土ブロックが小片ではあるが確認された。T2東端では第9-②層を切るような変換線の上に第6-①、②層が堆積している。変換線の変化の理由は不明であるが、あるいは平坦面が存在した可能性がある。

平坦面AとDの間にある溝は地表面から70cmの深さがある。底部は第10-②層。第3-①層では炭化物が面的に広がっており、第3-②～④層は安定した堆積状況から自然堆積によるものとみられる。

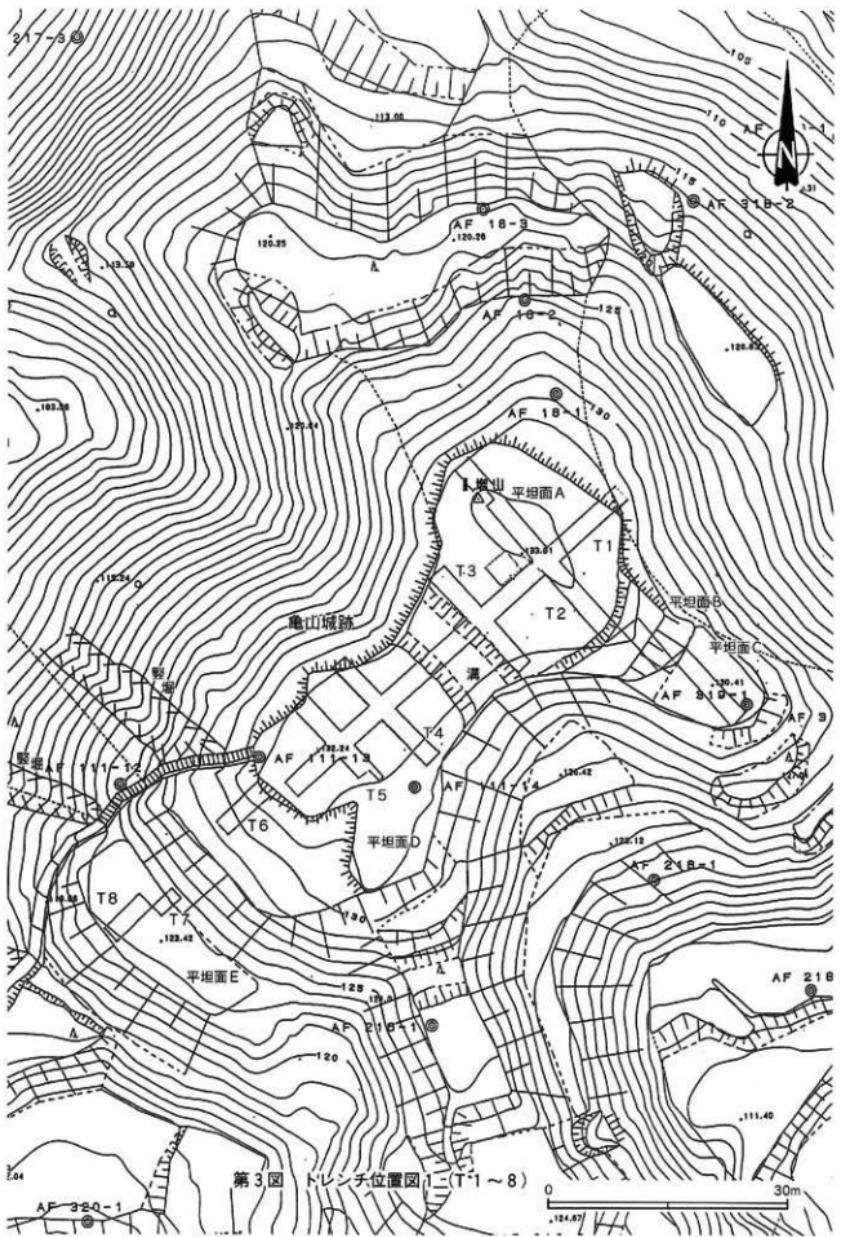
平坦面Dの層序は、平坦な部分では平坦面Aと同様である。平坦面Dの西側には約80cm下に地山を整形した平坦面が存在する。T4の断面観察から、平坦面へ至る斜面では第5-⑥層の直上に崩落したとみられる礫が多量に確認された。平坦面D付近では遺物の出土は少ない。T1とT5の交差点付近では、第1層中から集石が約2.5m四方の範囲内で確認された。石については一部を取り外してみたが、特に何も確認されなかった。

平坦面Dから平坦面Eへ至る斜面上段にはT6を設置した。第5-⑥層の下層に第10-②層が存在する状況は、平坦面AやDと同様であるが、T6北端では第7-①、②層を挟んでいる。いずれもシルト質であるが、第7-②層はややしまりが弱い。T6北端から下方へ急傾となることをふまえると、斜面中に平坦面が存在し、それを埋めたことが考えられる。

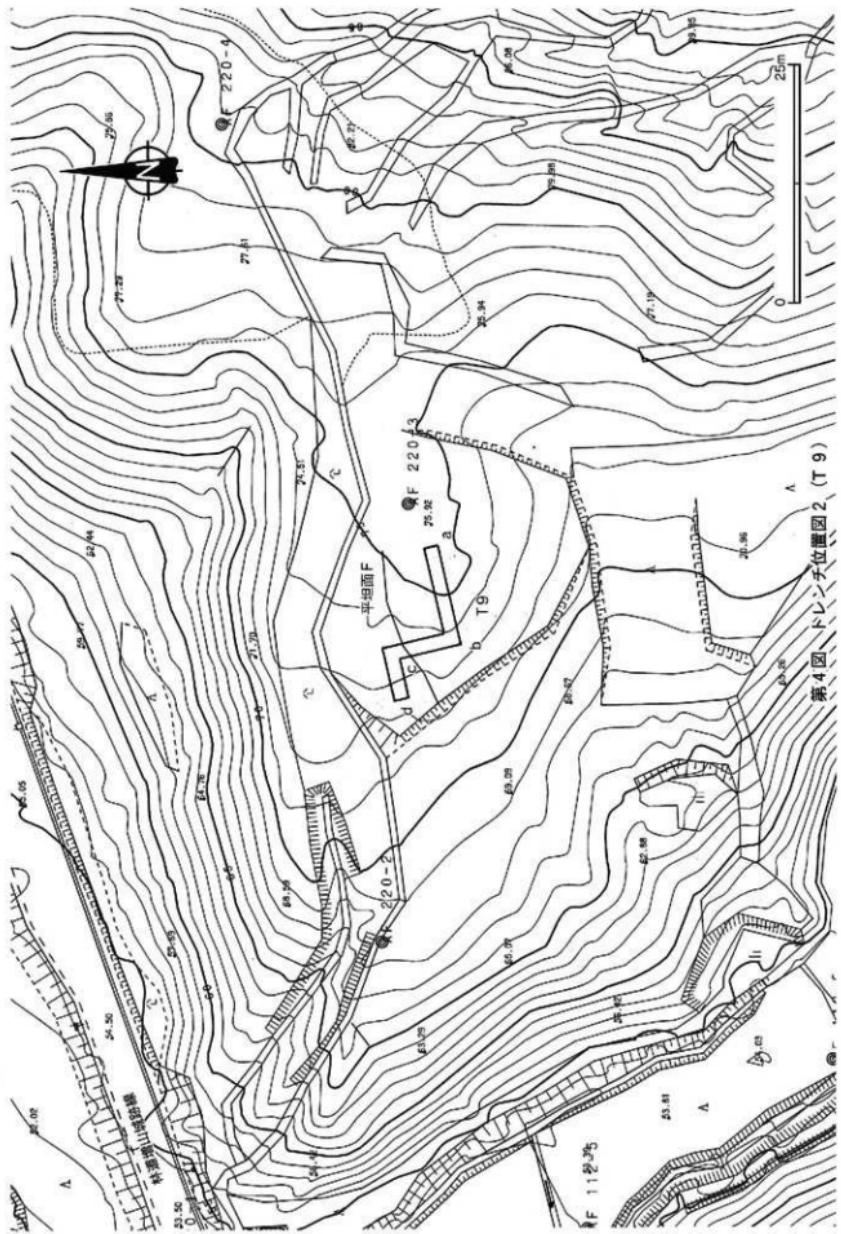
平坦面Eにおいては、第2-①～⑤層の崩落土、第8-①、②層の盛土、第10-①、②、⑤層の地山層が確認された。T7断面での崩落土では、第2-④層中には炭化物が多量に存在し、約20cmの堆積がある。第2-⑤層では明赤褐色の泥岩ブロックが多量に混じる。T8では、第8-①、②層の盛土が存在するいずれもシルト質であり、第8-②層では泥岩ブロックが混じる。第10-①層は明褐色で、IH表土とみられる。中世上土器の小片が1点出土した。

## (2) 赤坂山 (T9)

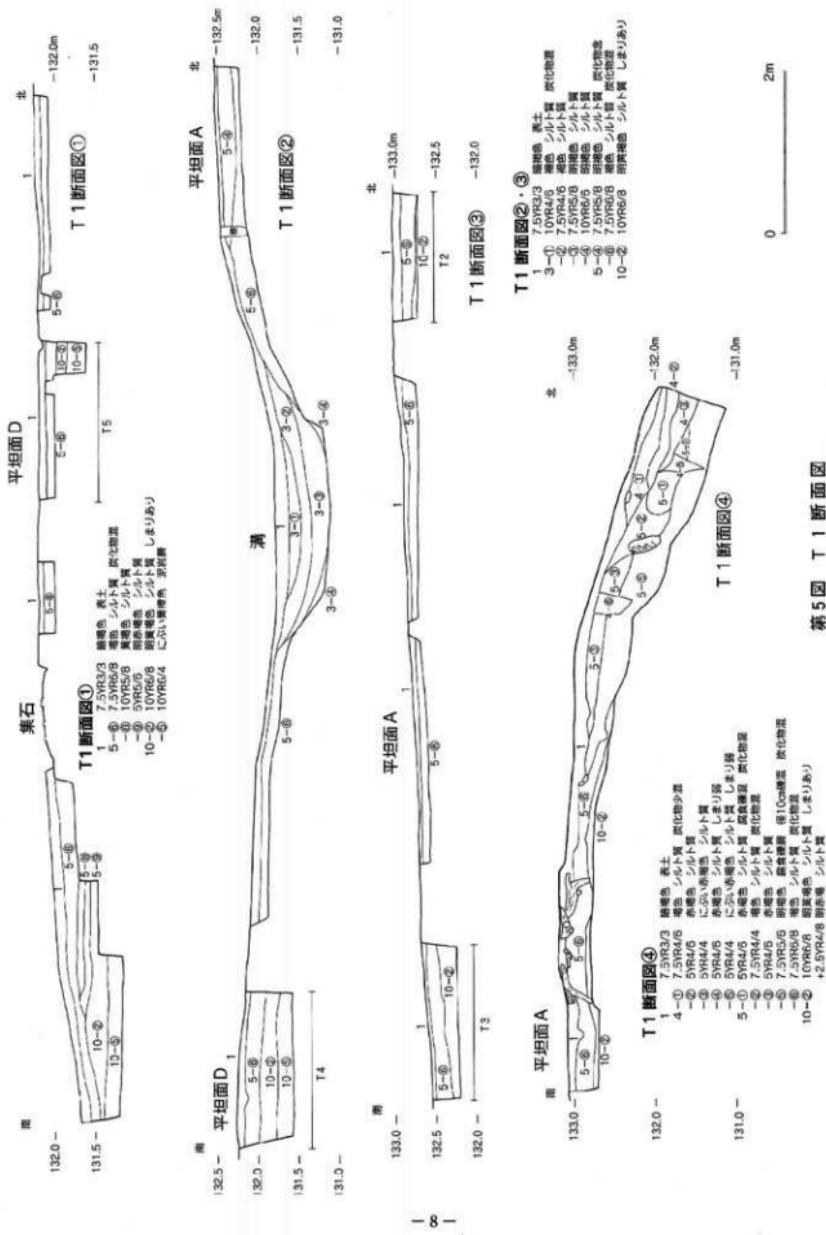
赤坂山では30m×25m程度の広さの平坦面Fに、クランク状のトレーン (T9) を設定した。基本層序は表土の第1層（暗褐色土）、地山の第4層（黄褐色土、シルト質）である。第2層（黒褐色土）、第3層（褐灰色土）は溝状構内の堆積土。T9では鉄滓1点が出土しているが、土器などの遺物が出土していないことから時代については定かでない。さて、T9周囲には径2～2.5m程度の塚状の高まりがある。表面にはこぶし大の石が多量に確認され、径50～60cmあまりの石が起立するかのように置かれていることから、墓との考えもあるが、伝承や地元の聞き取りなどでも詳細は不明である。

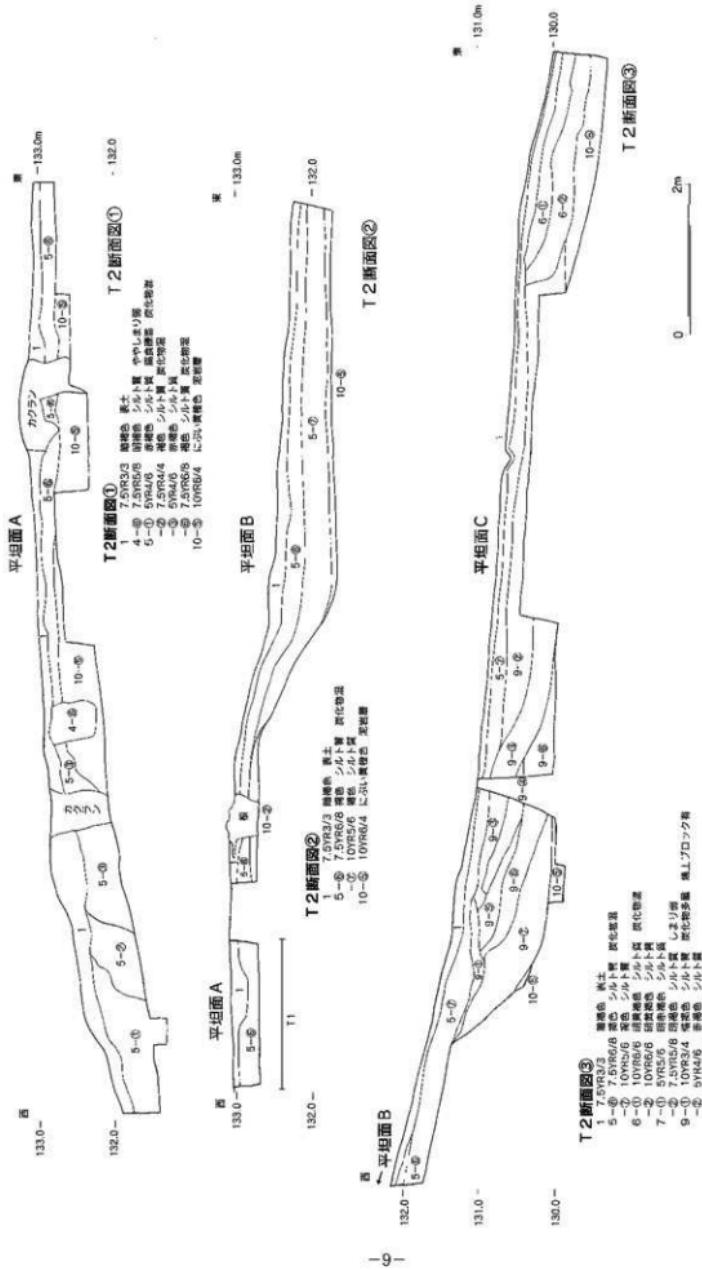


第3図 トレンチ位置図1-(T1~8)

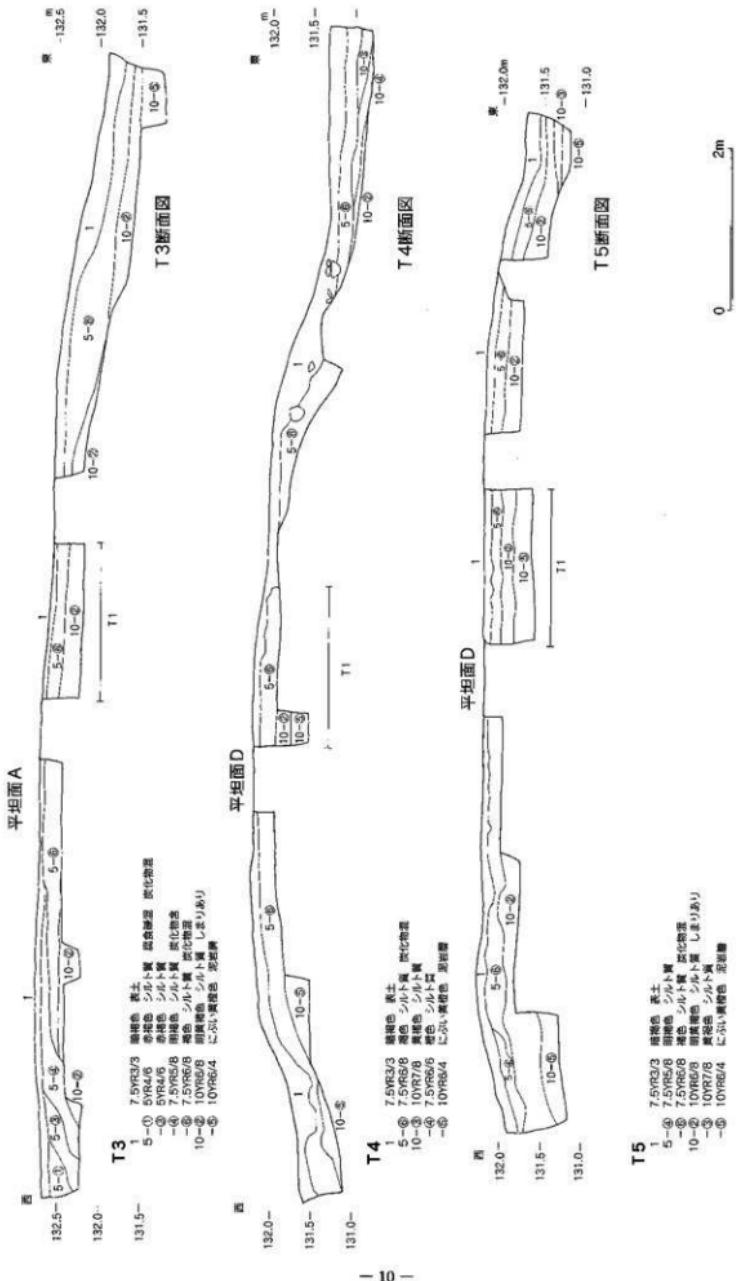


第4図 ドレンチ位置図2(T9)

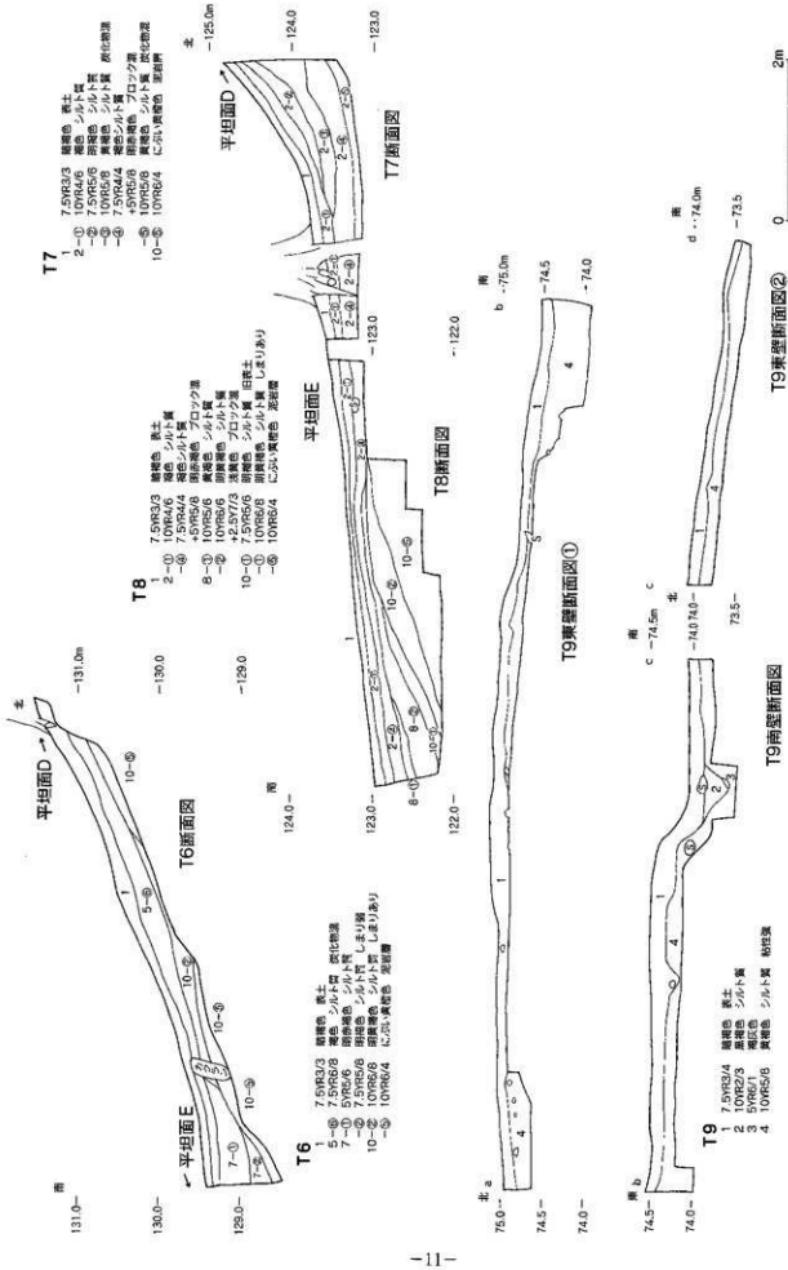




第6圖 T 2 斷面圖



第7図 T3~5断面図



第8図 T 6～9断面図

### 3. 遺物

今回の調査区からは中世土師器、越中瀬戸、瀬戸美濃、珠洲などの遺物が確認された（第9～11図）。

遺物の総数は859点で、そのうち瓦が120点あまりを占める。これは、高坪里神社の祠があったことに関係するであろう。中世土師器については約700点出土しているが、口縁部の形態や残存度から選択し、図化を行なっている。出土遺物の8割強が平坦面A、Bから出土した。

#### (1) 中世土師器（1～108）

中世土師器は口縁部の形態から、6類に分類した。

##### 1類 端部が鋭角的なもの（1～7）

1～7のいずれも直線的に傾斜する。1、6はスヌの付着がある。

##### 2類 端部が丸みを帯びるもの（8～18）

8は口径8cmの小皿。磨耗が著しい。11、18はスヌが付着する。14は端部外面のナデが顕著にみられる。

##### 3類 端部が三角形状を呈するもの（19～66）

22、35は縁部外面がわずかにくぼむ。24、33、38、56、59、61、62はスヌが付着する。32、53は内面から端部外側へのナデが顕著にみられる。65は内面底部裾をナデる。46～66は口縁端部から肩部にかけて一旦ふくらみをもつ。

##### 4類 端部が外反するもの（67～72）

67はスヌが付着し、端部外面にくぼみがある。68は口縁端部の外側をナデて面取りをしており、わずかにスヌが付着する。69は端部の外面にナデが顕著。71はほぼ完形で、内面には右回りのナデ痕が残る。

##### 5類 端部内面に凹みを施すもの（73～83）

73、74、78、83は口縁縁部の外側をナデて面取りする。74、75はほぼ完形で、75の内面には右回りのナデ痕がある。82、87は底を上にして重なって出土した土師器で、完形品である。いずれも、内面には右回りのナデ痕が残る。

##### 6類 端部をつまみあげるもの（84～108）

87、89、93、96、105はスヌが付着する。101、108はナデが顕著である。86～88、98、100、103は端部外面にくぼみがある。

#### (2) 珠洲（111～115）

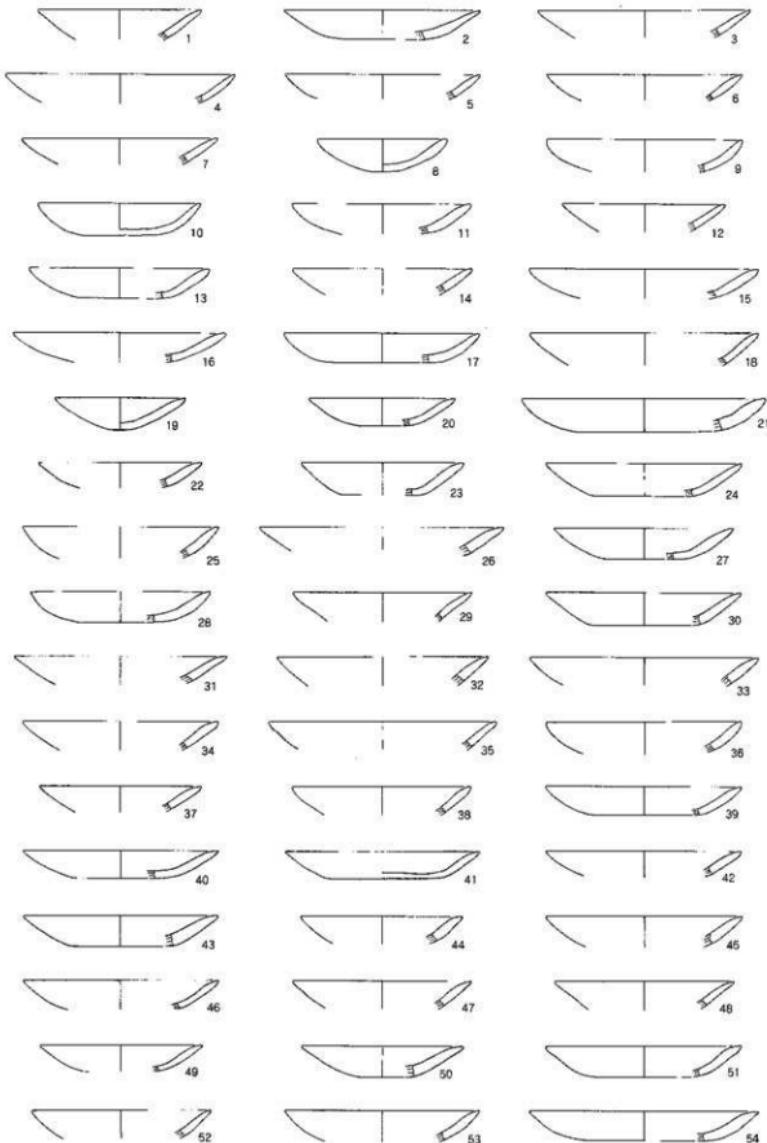
111～113は珠洲壺の口縁部で口径は12cm、14cm、17cmを測る。吉岡編年IV期の14世紀前半～中頃に比定される〔吉岡1994〕。114、115は珠洲窯。

#### (3) 瀬戸美濃

116は灰釉の皿で、口縁内側に縁取りがされる。117～119は鉄釉の大口茶碗。

#### (4) その他

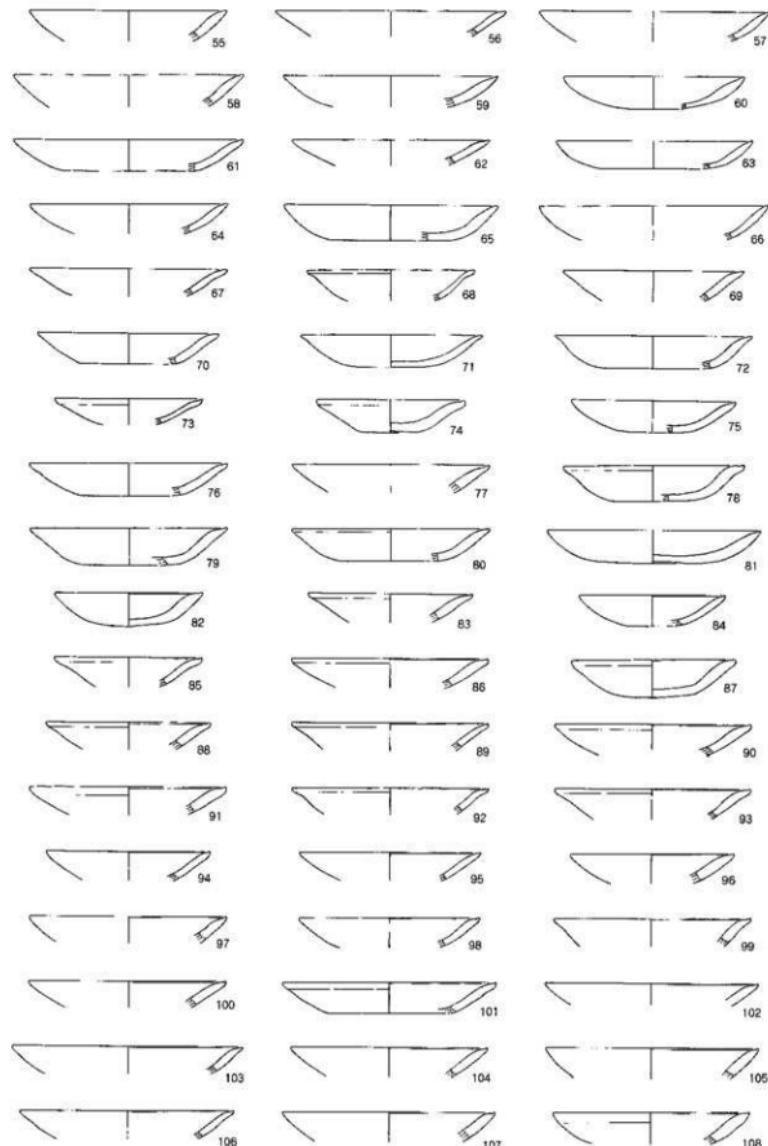
109、110は弥生土器とみられるが、小片のため判断は困難である。120～122は火鉢か。123は古銭。寛永通宝。124～126は釘。124は最大長35mm、6mm角。125は最大長50mm、最大幅8mmで、7mm突出した部分がある。126の大きさは推定で長さ141mm、幅11mm、厚さ7.5mm。頭の部分は直角に曲げて作られている。中央から下部半分には当時の木杭が貼り付いている。127は井石。最大幅は17mm。



中世土器類 1~54

第9図 出土遺物 1

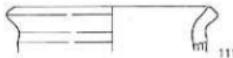
0 10cm



中世土器器 55~108

第10図 出土 遺物 2

0 10cm



111



112



113



114



115



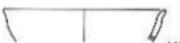
116



117



118



119



120



121



122



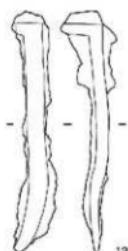
123



124



125



126



127

発生 109~110  
瀬戸美濃油 116  
土師質土器 120~122  
訂 124~126

珠洲 111~115  
瀬戸美濃天目茶碗 117~119  
古鏡 123  
碁石 127

0 10cm

第11図 出土遺物 3

## V まとめ

増山城跡に関連するとみられる文書で最も古いものは、貞司元年（1362）の二宮文書であり、その中には「和田城」という城の名称が書かれている。現在の増山城跡付近は近世には上和田村（砺波市上和田地区）、中和田村（城跡付近）、下和田村（高岡市下山田地区）の和田と呼ばれていた地域であることからも、和田城という名称の裏付けとなるだろう。さて、亀山城跡と増山城跡との城の形態や立地などの比較により、亀山城跡が先行すると考えられることから、和田城は現在の亀山城跡をさしているとみられる。このことからすると、少なくとも南北朝期には亀山城が造られていたということになる。その後は、神保氏、上杉氏の城となったとみられ、16世紀半ばに増山城が造られるまでは砺波地方から射水地方をにらむ拠点であったと考えられる。

亀山城跡の調査においては、平成14年度に実施された林道増山城跡線道路拡幅工事に伴う発掘調査成果から、15世紀後半の中世土師器が確認されたこと〔砺波市教委2003〕をふまえ、同様の時期の遺物や遺構の検出を期待していた。結果として、建物遺構や15世紀後半頃の遺物は確認されなかった。出土した中世土師器は、口縁端部のつまみあげや端部の外反などから、16世紀中頃から16世紀末のものと比定される。これは、平成14年度までの増山城跡総合調査における調査成果と並行する時期であり、このことから亀山城と増山城の並行利用が確認された。戦時には、おそらく増山城を本城として、周辺では最も高い位置にある亀山城を巨人な柵台として利用していたものであろう。ただし17世紀初頭の遺物が確認されていないことから、前田氏入城以降は政情の安定により、亀山城が使われていないことが考えられる。

各トレンチの断面観察では、第10-②層により平坦面B、Cの斜面を造り出していることや、平坦面Cにおける第9層の堆積状況から、地山整形を行った段階があるとみられる（第1期造成）。しかし、遺物包含層は表土層および第5-⑥層がほとんどを占めることから、第5層を盛土した時点での利用状況をみることができる（第2期造成）。その他にもT1北端やT2東端、T6南端、T8南端において盛土の状況が確認される。層の相対的な関係からT2東端やT6南端は第2期造成以前、T8南端は第2期造成頃、T1北端は第2期造成以後とみられる。

また、T3西端の第5-③層から、焼土の付近で中世土師器が重なって出土している。推測の域をでないが、完形品を置いていること、意図的に重ねて配置していること、焼土のすぐ近くで出土していることから、盛土を行なったことに対する地鎮の意味合いが強いものと思われる。

赤坂山洞企画では、増山城跡とは谷を挟んで対峙した平坦面において、城跡関連の遺構や遺物の確認を目的としてトレンチを設定したが、成果は得られなかった。

最後になるが、これまでの増山城跡の調査成果をふまえ、今後は増山城跡のその本来の姿を明らかにしていくことをめざしたい。

### 《引用・参考文献》

- 砺波市1990『砺波市史資料編1 考古、古代・中世』
- 砺波市教育委員会1978『富山県砺波市梅根野遺跡群予備調査概要』
- 砺波市教育委員会1998『増山城跡I』
- 砺波市教育委員会1999『増山城跡II』
- 砺波市教育委員会2000『増山城跡III』
- 砺波市教育委員会2002『増山城跡IV-V』
- 砺波市教育委員会2003『増山城跡VI』
- 砺波市教育委員会2003『林道増山城跡線道路拡幅工事に伴う発掘調査報告書 増山城跡発掘調査報告』
- 砺波市教育委員会・砺波郷土資料館1991『増山城跡調査報告書』
- 北陸中世土器研究会編1997『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』
- 吉岡康暢1994『中世須恵器の研究』



1



2



3



4



5



6

#### 写真図版 1

- 1 亀山城跡最頂部平坦面
- 2 平坦面A・B発掘状況
- 3 溝検出状況
- 4 平坦面C発掘状況
- 5 平坦面B-C間盛土状況
- 6 T1北端盛土状況



7



8



9



10



11



12



13

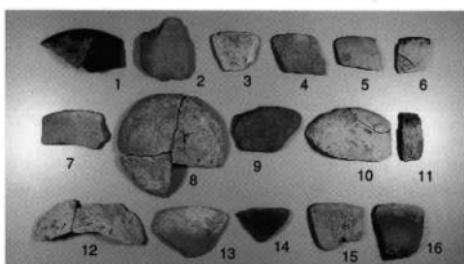
#### 写真図版 2

- 7 T 6 発掘状況
- 8 集石検出状況
- 9 T 7 発掘状況
- 10 T 3 中世土師器出土状況
- 11 T 9 発掘状況
- 12 T 6 より平坦面Eを見る
- 13 高坪里神社跡地

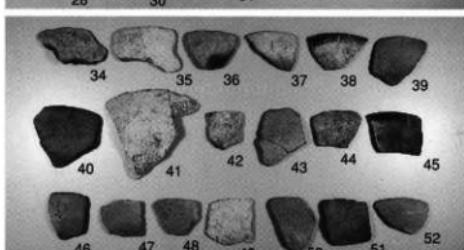
写真図版 3

出土遺物

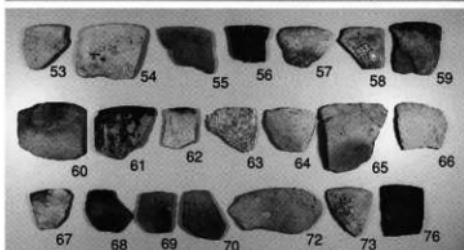
14 No. 1~16



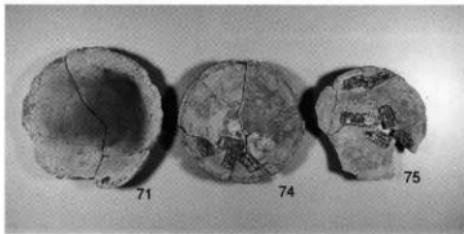
15 No. 17~33



16 No. 34~52

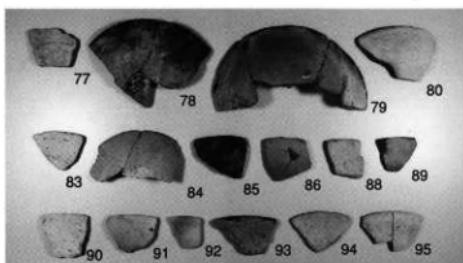


17 No. 53~70, 72, 73, 76

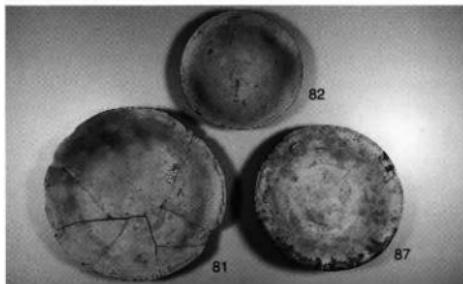


18 No. 71, 74, 75

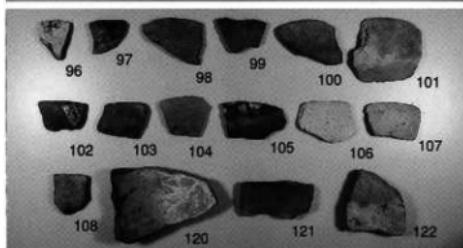
写真図版 4  
出土遺物



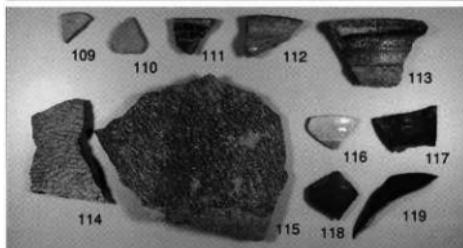
19 No. 77~80, 83~86, 88~95



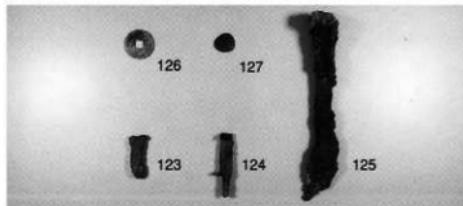
20 No. 81, 82, 87



21 No. 96~108, 120~122



22 No. 109~119



23 No. 123~127

# 報告書抄録

ふりがな	ますやまじょうせき							
書名	増山城跡							
シリーズ名	(7)							
編集者名	砺波区裕							
編集機関	砺波市教育委員会							
所在地	〒939-1398 富山県砺波市栄町7-3 TEL. 0763-33-1111							
発行機関	砺波市教育委員会							
所在地	〒939-1398 富山県砺波市栄町7-3 TEL. 0763-33-1111							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
市町村	遺跡番号							
増山城跡	富山県砺波市 増山字一の丸 3324 外	208	001	36° 39° 19°	137° 2° 42°	20030929 ～ 20031211	対象面積 7,381m <sup>2</sup> 発掘面積 294m <sup>2</sup>	埋蔵文化財 緊急調査事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
増山城跡	山城	中世		溝 切岸		弥生土器、珠洲 瀬戸美濃、中世土師器 釘、古銭、墓石		増山城との併行利用 が判明。地鎮とみら れる痕跡を確認。

平成15年度増山城跡総合調査概報

## 増山城跡 VII

2004年3月31日

発行

砺波市教育委員会

〒939-1398 富山県砺波市栄町7番3号

Tel 0763 (33) 1111 Fax 0763 (33) 6828

印刷

中越印刷株式会社

〒939-1351 砧波市千代147

Tel 0763 (32) 3026 Fax 0763 (32) 3027

